

12. ア・ラ・カルト

地 底 の 嵐

水 島 淳

1967年8月22日 地底250mの枢鳳の間にアタックキャンプを置いた第1次アタック隊6名は、枢鳳の間から続く200mの横穴を徑て、第3次調査(1966年)の最深部(290m)に達し、底へのアタックを開始した。第Ⅳホールからハンゴを降し、更に下部を究めようというのである。希望に寒さを忘れ、20mのハンゴを1段1段と踏みしめながら下ると、そこにはホールがあったが水の流れは足元の間に消えており、まだ底でないことを示していた。それより下部は、途中まで4~5m単位の階段状の堅穴が続き、ロッククライミングの要領で下降する。しかし、頭から3℃の冷水を浴びて手足がしびれ、隊員の行動は非常に鈍くなって来た。ハンゴなしでは行動性を欠くので、第Ⅳホールからのハンゴにさらにハンゴを連結したが、この時もはや冷水との戦いで気力体力に限界が来ていた。テントなしの悪条件下の洞内生活が、彼等には大きくひびいていた。

1967年8月23日、朝、昨日の地点より下部を調査しようと勇んで出発したが、再度の挑戦も空しかった。次のホールには、手持ちのハンゴでは届かなかったのである。孤独の滝に使用している70mのハンゴの下部を切り離して、繋ぎ合わせねばならない。1次アタックでは無理だ。なぜなら、隊員にとって、悪条件下の洞内ビバーク2泊3日は限界であった。しかし、彼等はすでに青海千里洞から370mという驚異的な数をむしり取っていた。彼等が出洞したのは23日午後8時、入洞してから実に60時間を経ていた。そして以下のアタックは2次アタック隊にバトンが渡された。

1967年8月25日 2次アタック隊として我々5名は入洞した。1次アタックの経験からテントを持ち込み、燃料であるガソリンの量も倍にした。5名のアタック隊員の到着と同時に、ハンゴ70mの下部25mがアタックに備えて切り離された。ここで我々は上部の隊員の助けなしには地上に戻れなくなった。アタックテント内の生活は確かに快適であり、洞窟に居る自分のまずい歌も快い。我々はこの後すぐにアタックに向う予定であったが、記録用カメラをベースキャンプに忘れて来たため、明日にその予定を延すことにした。しかし、この小さな偶然が我々を死から救うとは誰も予想しなかった。というのは、もし我々がアタックに出掛けていたなら、途中の横穴の1部が水で埋まり、3℃の水に濡れながら、気温4℃の洞内で食糧もシュラフもな

しに、少なくとも10日以上閉じ込められることになったから。我々は地底250mの世界で、新潟地方を襲ったあの豪雨に直面した。上部の隊員による雨天を知らせるトランシーバー連絡と問髪を入れず、70mの地底の大滝は落石を伴って増水し始め、時間と共にその水量を増していった。もはや洞内に潺する楽しい歌声は聞かれなかった。それどころか不安は胸を駆け巡り、口から出ようとする歌を殺し、アタックキャンプを沈黙と恐怖の世界に落し入れた。水は柩鳳の間から通じる横穴を完全に満してしまい、滝水も増水しているので我々は地底250mで完全に孤立させられてしまった。70mの滝上部から柩鳳の間をめがけて落ちる落石の音は体を凍らせるごとく洞内に響き渡る。もう地上には戻れない。この身を凍らせる様な恐怖感は、次第にテント内の我々を石の様にしていって。誰もテントから出て見ようとはしなかった。まるで不運な結果の宣告を少しでも延ばそうとしている様に。さらに増水することが予想されたので、早い目には夕食の用意を始めることにした。皆が夕食の用意をしている間、1人で柩鳳の間から出ている2本の支洞を1年前の記憶をたどりながら探してみる。脱出口があるかも知れないと思ったからである。結果は非観的だった。テントに戻り、咽も通さないカレーライスをむりやり押し込んで、再度テントから飛び出す。水は順調に横穴に向って流れているが、この横穴の1部分にルートゼロと呼ばれる直径1m程の所があり、ここが詰まると柩鳳の間の水位は上昇し、我々は死から免れられない。もう寝よう。滝や落石の音を聞いていると気がめいるばかりだ。シュラフにもぐり込んで目を閉じると、やけに雑音が耳につく。それも気のせい次第に大きくなり、両手で耳を塞ぐが、体を伝って来る響はどうしようもなかった。

1967年8月24日 午前4時、突然、ドカーンという響が洞窟を揺さぶった。増水だ。さらにひどくなった。テントから出ようと入口を開けたとたん、水しぶきがテントの中に吹き込んで来た。外に出てみると滝の水しぶきで視界がまったくきかない。30秒程でテントに戻ったのだが、頭からしずくが落ちるくらい濡れていた。我々はこの時地底の世界で嵐を見た。誰が地底の世界に吹きすさぶ嵐を想像したであろうか。滝水の落下によって風が巻き起り、雨の如くしぶきを吹きつけ、テントははためき、柩鳳の間はゴーゴーと震え、落石が地面を叩き、そして地面は揺れに揺れた。この水量では滝に掛けられたハシゴは流失するだろうし、天井の岩が落盤する可能性もある。それより柩鳳の間の水位が上昇して、滝の渦に巻き込まれるのではないだろうか。我々はただ水位が上昇しないことを願いながら、自分自身に語りかけ、もう誰も話さなかった。5名の中で最もこの洞内事情に詳しい私は、この状態が如何に危険なものか良く知っていた。日誌をビニール袋に入れてエアマットに結びつけた。成すすべのないこの状態で、他の4人に日誌を見付けられてはむやみに彼等を不安にさせるだけだと思いそれをシュラフの陰にしておいた。

2日分の予備食、洞口からの天気連絡、ガソリンなど、我々は雨天に対し万全の装備を備えてきたつもりだった。しかし、予想もつかなかったこの水量は一体どうしたことだ。うかつだった。後で判った事だが、小滝5万分の1の地図には大きな誤りがあり、実際には存在している1本の尾根が地図にはなかったのである。この尾根が1本あることによって、青海千里洞の南方で広範囲に渡る部分が1つのスリバチを形成し、そこを流れる2~3本の沢が青海千里洞に直結されていたのだった。しかし今さらあれこれと思案を巡らせても手遅れである。風に揺れる1本のローソクの光が、隊員の笑いの止った顔を浮び上がらせていた。眠りともつかない眠りが5つのシュラフに訪れた。記憶にとどまらぬ3時間が経過した。午前9時、我々は空白の記憶から目覚めた。切り抜けた!! まるで夜に見た悪夢を打ち消すかのように、どっと歓声が挙る。口が自然に歌い出す。洞壁が銜を返し始める。しかし、柘鳳の間から下部に通じる横穴がまだ水で塞がっていたため、アタックはもちろん、第1次アタックで使用された装備の回収さえ断念せざるを得なかった。

1967年8月26日 やっと1日だけ晴天となり、滝水の減少をまって脱出。入洞して60時間を経ていた。洞口で「よかった、よかった」と交し合う声の中で、かじりつく様にして飲んだ暖いミルクの味は忘れられない。夜になってはまた雨が降り始めた。カメラを忘れていなかったら、と、胸を撫で下す。

80時間の洞内生活

松村泰秀

1968年8月10日午後5時、実に80時間余の緊張から解放され、今にも大きな夕日がドリーネの壁面より落ちんとしている。すばらしい幻想の世界に忙然と佇たずんでいた。安堵と共に湧き上がる喜びを静かにかみしめながら……。青海千里洞、それは現在まで有形無形にかかわらず、我々探検部員に対し、常に何らかの抱束、威圧感を与え続け、人間の力を拒み続けた自然の力の偉大さは驚異の的であったと共に、我々の未知に対する探求心を限りなく湧きたたせてくれるに充分有り余るものが有った。今日まで千里洞は幾多の青年の燃えたぎる情熱を受け留めつつも、結局は押し返して来たのである。そのベールはあくまでも厚く、かたくなに閉ざされていた。そして今回も20名の隊員が、千里洞から、未知のベールを剥ぎ取らんとする情熱を秘め、